青山国際政経論集 105 号，2020 年 11 月

研究ノート

北朝鮮経済の実態
――両江道恵山からの脱北者の証言

木　村　光　彦*

1.　はじめに

北朝鮮では 1990 年代に深刻な飢餓が起り，それとともにいわゆる脱北者が増加した。脱北者は北朝鮮社会の実態にかんする貴重な情報源となり，その証言から多くのことが明らかになった。その代表的成果，伊藤（2017）は，聞き取りや手記を通じて数十名の脱北者から情報を得，北朝鮮社会を総合的に考察したものである。それは日本語によるもっとも詳細な研究で，高い評価に値する。しかしもちろん，これまでの調査ですべてが尽くされたわけではない。北朝鮮は国としては小さいが，地勢，気候，土壌など地域差が少なくない。個人の経験も各人各様である。そのため，異なる地域からの脱北者の証言を集めることは，北朝鮮研究にとって依然重要な意義をもっている[1)]。

本小論ではこの趣旨から，両江道恵山からの脱北者，石川学氏（本名）の証言を紹介する[2)]。焦点は経済に絞る。

石川氏の略歴は以下のとおりである。

1958 年　東京都大田区蒲田に生まれる。父は朝鮮人，母は日本人。父は 1914

*　青山学院大学名誉教授。

1）　日本語で書かれた脱北者の手記や証言集は，朝日新聞アエラ編集部編（1995），斉藤（2010）など少なからずあるが，脱北の経緯に重点をおいたものが多い。

2）　証言聴取：2019 年 11 月 30 日（NK 会での講演・質疑応答），2019 年 12 月 20 日，2020 年 1 月 30 日，3 月 23 日，4 月 10 日（個人インタビュー）。石川氏は 2018 年，北朝鮮政府を相手として帰国事業の責任を問う裁判を東京地方裁判所に起し，2020 年現在，係争中である。

© Aoyama Gakuin University, Society of International Politics, Economics and Communication, 2020

年，慶尚北道尚州生まれ，18 歳のころ来日。祖先は代々，李王朝に仕える教育係で，山林を所有する資産家。

1972 年　姉，兄とともに北朝鮮に「帰国」。清津港に到着。きょうだい 3 人，両江道恵山に配置される。

1973 年　恵山高等中学（日本の中学に相当，5 年制）の 4 年次に編入。

1974 年　恵山高等機械学校（日本の高校に相当，2 年制）入学。

1976 年　恵山設計事務所に就職。

1979 年　恵山総合機械工場に移る。

1984 年　朝鮮労働党員になる。

1992 年　恵山市水道・暖房事業所に移る。

1994 年　製麺・酒造工場に移る。

2001 年　中国に脱北。NGO を通じて日本の領事館に保護を求める。

2002 年　日本に戻る。

2020 年現在，東京在住。

小学校 1 年から朝鮮学校で学ぶ。3 年生の頃から思想教育が始まり，金日成思想，革命歴史の授業が行われる。姉が『朝鮮新報』（朝鮮総聯の機関紙）に勤め，北朝鮮が地上の楽園と信じ切っていた。情に勝つ思想を叩きこまれていたので，一緒に帰国した。

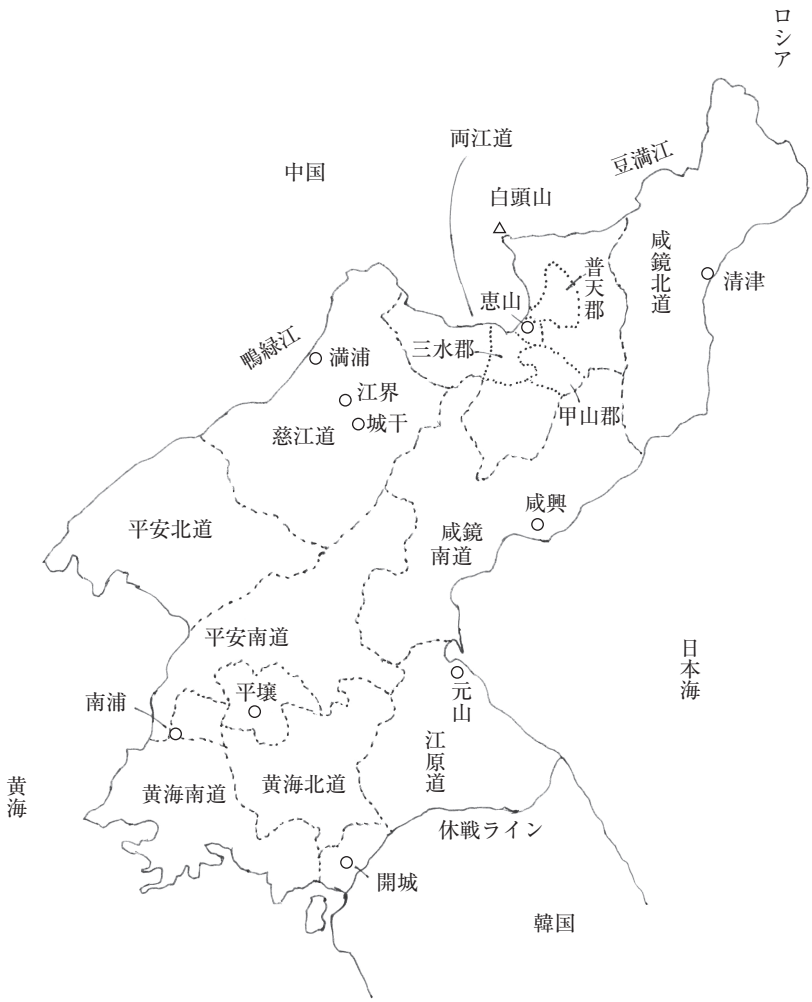
同じ帰国船には，新たな機械をもった技術者集団がいた。

清津に着いたとき，出迎えの住民のやつれた姿，貧弱な衣服を見て，ひどい所に来たと思った。自分たち帰国者のほうがはるかに良い衣服を着ていた。

招待所で係官の指示を受けた。姉は平壌で大学に入ることを希望したが拒否された。配置先として元山，清津を示されたが，平壌に固執したため反感を買い，辺鄙な恵山に行かされることになった。白米 60 キロと配慮金として 1 か月分（60 ウォン弱）の給料をもらった。また，持参した 1 万円を朝鮮の貨幣，64 ウォンに換えた。

姉は『両江日報』で働くが，失望感から 1974 年に病を発症し，その後死亡，

北朝鮮地図


ロシア
両江道
中国
豆満江
白頭山
咸鏡北道
清津
普天郡
恵山
鴨緑江
満浦
三水郡
江界
城干
甲山郡
慈江道
咸興
平安北道
咸鏡南道
平安南道
日本海
元山
平壌
南浦
江原道
黄海
黄海南道
黄海北道
休戦ライン
開城
韓国

兄は製紙工場に勤務した。

2.　1970 年代から 80 年代初の恵山での生活―衣食住

帰国当時，恵山の人口は 10–20 万，周辺の里（農村）も市に組み込まれていたため，かなり広域であった。恵山には 200–300 世帯の帰国者（そのなかで日本人の妻 3 名，夫 2 名）がいた。

恵山駅周辺が市街地で，平屋と 5 階アパートが並ぶ。7 階建ての旅館もあった。1958 年に金日成が現地指導に来，以後，1964 年ごろまでにソ連の設計でアパート群が建設される。平屋の屋根には，瓦が不足しているので，山から切り出した石（オンドルを作るときに使う石でオンソッと呼ばれる）を載せる。

住み始めた当初，アパートには 60 所帯が入居，5 階建てで，各階 12 所帯，私たちは 2 階に居住する。トイレと水道は共用。女子が 1 階の共同水道までバケツ（ブリキ製）で水を汲みに行く。バケツを頭に載せて上の階まで階段を上る。

1973 年春から 74 年にかけて，姉や他の帰国者（同じアパートの 3 階と 4 階にいた）が役所（僑胞課）に掛け合って支援をとりつけ，人民班で相談の上，各戸に水道を引いた。工事自体は，あちこちからパイプを調達し，自分たちでやった。

人脈と金（とくに人脈）がある住人がいるアパートでは，材料を調達して水道工事ができるが，そうでないアパートは共同水道で我慢するしかない。

住戸は国家機関が建てるのが原則であるが，不十分なので自分たちで建てたり，修復する。

1 戸当りの広さは 6–8 畳。各階の両端の住戸は一部屋（ワンルーム）。その間の住戸はいわゆる 2K。1 戸当りの家族数は 5 人ぐらい（子ども 3–4 人）が多かった。

暖房はオンドルで，配給の石炭・薪を焚く。燃料は勤務先あるいは恵山市の配給所でもらう。設計事務所勤務のときはその事務所から，その後は兄が勤務していた製紙工場から石炭を運んだ（同じアパートの住人の多くは製紙工場に勤めていた）。製紙工場には貯炭場があり，そこから家族数に応じて半年分が配給される。トラックは 1 回 4–5 トン運べるが，牛車ならば同 1 トンほどなので何回も往復する。工場の運送課に賄賂を払ってトラックを出してもらった。

食糧は，子どもの分も含め，職場から配給票をもらう。高校生になると子どもの配給票は学校から出る。3–4 洞（区域：市の下部単位）に 1 か所ずつ食糧配給所（供給所）があり，半月に 1 回，取りに行く（配給日は戸毎に決められている）。大人の標準配給量は 1 日当り穀物 700 グラムで，これを日数分もらう。布製の配給袋を持って行く。袋は商店で買うか，自分で作る。

両江道は昔から流人の地で貧しかったが，恵山は革命の聖地であるため，中央政府から優遇され，配給食糧は白米 7 割，雑穀 3 割だった（他所では白米 3 割，雑穀 7 割が普通）[3)]。雑穀は主に小麦粉またはククス（小麦粉から作った麺）で，秋になるとジャガイモになる。ジャガイモは雑穀 1 にたいし 5 の割合でもらう。白米は数年前の古米（軍隊からの払下げ米）で，小石など夾雑物が混ざっている。特別な器具で梳き，それを取り除いて炊く。

駅前に「踏査専門商店」があり，金日成の革命闘争を記念する商品を売っている（各地から生徒が見学に来る）。ここには配給袋もある。たまに歯ブラシなどを売っていることもある。

食料品商店は大体，各洞に 1 つずつある。世帯ごとに割当てがあり，公定価格で買うが，普段，品物はない。祝日など特別な日にのみ，味噌，醤油，飴，肉，酒，卵（1 世帯 10 個ずつ）など入荷するので，配給票をもって取りに行く。味噌，醤油は市内の食料品工場で作っている（各都市には普通，食料品工場がある）。

食用油は大豆油，菜種油が普通で，食料品工場でも作るし，家庭でも作る。一般には大豆油が配給される。

野菜を供給する商店もあるが閉店していることが多い。恵山では野菜があまり生産されない。キムチ漬けのための白菜も不足する。人脈を使って，10 月 10 日ごろまでにできるだけ多くのキムチ漬け用野菜を集め，これを翌春，5 月ごろまで食いつなぐ。

その他，百貨店（恵山百貨店），建材商店，日用品商店などいろいろな商店が

3）　1937 年，金日成らが恵山近くの普天堡の駐在所，営林署など行政機関を襲撃した。北朝鮮ではこれを普天堡戦闘と呼び，「朝鮮革命」の中心的な出来事としている。

あるが，普段は売る物はなく，飾り物（陳列品）だけある。百貨店は 3 階建てで，最上階は事務所，売り場は 1 階と 2 階になっている。

恵山には，自分が知っているだけで 8 つの便宜協同があり，看板を出して浴場，写真店，床屋などを経営していた[4)]。組合の支配人や党秘書は国が決めるが，仕入れ，販売は組合員が自主的にやる。収入のうち国が 3 割か 4 割取って，残りは組合員相互で分配する。80 年代に兄が便宜協同で写真撮影師になった。一般労働者よりはるかに実入りがよく，月 150 ウォン稼ぐ（一般労働者は 60 ウォン）。フィルムや印画紙などをソ連帰りの労働者からヤミで買う。

街に市場がある。建国後，市場は廃止されたが，1950 年代から 60 年代に金日成が市場をなくす必要はないと言い，復活した（都市と農村の間の消費の差をなくすという政策による）。郊外の協同農場の自留地で作った野菜，山で採った山菜（ゼンマイなど），大豆などを農場員の家族（爺さん，婆さんが多い）が市場に売りに来る。自由価格で，公定価格よりは高いが，非常に高いというわけではない。市場は毎日開かれているが，農場員が売りに来る日は農場が休みの日などに限られるので，十分な量は出回らない。

街でも住戸周辺で自給用に豆やトウモロコシを栽培する者がいるが，土地が狭いので大した規模ではない。

風呂は，1 か月か 2 か月に 1 回，共同浴場に行く。気持ち悪いので，外貨商店で大きな鉄釜を買い，家で湯をわかして行水をした。

70 年代後半ごろから，石炭不足でボイラーを焚けず，共同浴場が使えなくなる。私は，兄の製紙工場か紡織工場に行って風呂に入った。一般の住民は，夏は鴨緑江で水浴びをする。

アパート周辺には赤，黒，白毛などの犬がいる。食料としてその肉を食べる。毛皮は帽子にする。

シャツ，パンツ，ズボン下などは麻と綿の混紡品で，恵山の紡織工場（後述）で製造したものを，商店を通さずに，各人が工場から直接手に入れた。麻織物

4）　便宜協同は政府公認の協同組合で，さまざまな個人サービスを提供する。

は，ワイシャツなど日本では高級なイメージがあったが，北朝鮮ではそうではなく，黄ばんでいた。着心地が良い，悪いというレベルではなく［あるだけまし］，同じ下着を 1 週間以上着る。パンツをはいていない子どもがいた。

1977 年にブラジャー（おそらく輸入品）が配給された。金日成がその前々年に東欧を歴訪して刺激を受け，朝鮮女性にもおしゃれが必要だと言って，配るように指示を出した。外国からデザイナーを呼び，朝鮮女性の体型に合うブラジャーを作らせた（同時に国産の牛皮製ハイヒールも作らせた）。ただし対象は女子生徒・学生のみで，一般女性はブラジャーを知らない。1982 年に初めて平壌に行ったときに，平壌第一百貨店で妻のためにブラジャー（国産品）を買った（普通は平壌市民以外には売らないが，頼みこんで 2 枚だけ売ってもらった）。

専用の生理用品はない。ガーゼを入手して自分たちで作る。

ほとんどの者が軍隊に行き，除隊時に何着か軍服を持って来る。男女とも，それを作業着や普段着として着ることが多い。軍服はジーンズのような綿製だが，麻も混じっていたと思う。部厚くて丈夫。

防寒着（コート，オーバー類）は，外側は「スプ混紡」（スフと麻の混紡）の布地，内側は綿のものが多かった。恵山の紡織工場で作っていたと思う。洗濯すると縮む。

咸興工場のビナロン製衣類は，ときどきセーターが供給されたことはあったが，それ以外には記憶がない[5)]。

商店の陳列品にテトロン製の人民服がある。朝鮮語でテトゥロンと呼び，丈夫だったので，ナイロンと並んで人気があった。生地は輸入したものだと思う。月給が 60 ウォンぐらいなのに，人民服は上下，公定価格で 120–140 ウォンした。人民班に衣類配給票が来るが，高いので買えない人が多い。各家庭に 1 着ぐらい人民服はあったが，それは混紡で質が悪い。

日本から持ってきた服は質がよいので，着て歩くと，住民が珍しがってゾロ

5） 正しくは，咸興ではなく咸興近隣の本宮の工場。ビナロンは戦前日本の石炭化学の産物で，京都帝国大学の桜田一郎が開発した。桜田の弟子の李升基が戦後，北朝鮮にその技術を持ち帰り，金日成が直々に工業化を推進した。詳細は，木村・安部（2008: 183–88）参照。

ゾロと跡をついてきた。

布団は家庭で作る。綿は配給されることもあるが，むしろ知合いから調達する（横流し）ことが多い。打ち直してずっと使う。

石鹸が足らない。1 世帯に月 2 個ぐらい配給される。一時期，製紙工場で洗濯石鹸を造ったが，あまり固まっておらず，すぐに水に溶ける。興南方面で造られた石鹸はまだましだったが，ザラザラして衣類が破けそうになる。イワシ油から造るので臭う[6)]。

住民は，滅多に風呂に入らないうえに，同じ下着を着続け，洗濯しても石鹸の臭いがつくので，体臭がきつい。帰国当初は気になったが，そのうちに慣れた（自分自身も同様になる）。

電球は国産品で，恵山でも製造しているが，質が悪い。電圧が不安定で，すぐに切れる。1 か月もつかもたないかだった。平壌の電球工場からときどき入って来る電球は，数か月か半年ぐらいもつ。

製紙工場が十分に稼動していたので，ノートなど紙類は，質は悪いが，供給された。

窓には布のカーテンはなく，クラフト用紙を吊り下げる。有線放送で（訓練の）「空襲警報」という声が聞こえると，それを引き下げて明かりが漏れないようにする。

専用のトイレットペーパーはなく，クラフト用紙を強く揉んで柔らかくして使った。1984 年ごろから，仕送りを受取りに平壌に年 2 回ほど行くおり，トイレットペーパーを買って持って帰った。

10 月後半から，共同トイレの人糞がガチガチに凍るようになる。すると，協同農場から農場員が牛車を引いてやって来て，人糞をツルハシで砕いて持って行く。夏はバキュームカーが来て，吸い上げて農場に持って行く。バキュームカーは，はっきりとは分からないが，日本製のものより圧力が大きかったのでソ連製ではないかと思う。

6） イワシ油を原料にした油脂工業は日本統治期に発達した産業である（木村・安部 2003：59–60）。

靴は豚皮製が多く，牛皮製は高級品だった。恵山でも靴は作っているがなかなか手に入らない。

日本在住の母が送ってくれる品を知合いと物々交換し，不足するものを手に入れた。日本からの仕送りがなく給料だけだったら，暮らしていけない。

1975–76 年ごろ，外貨商店ができ，円で品物を買えるようになる。ヤミ商売も興ってきて，市場価格が形成される。

ソ連との貿易で，小麦粉 4 トンと交換に白米を 1 トン輸出すると聞いた。

しばしば計画停電がある。電圧は 220 ボルト（ソ連と同じ）だが，安定しない。帰国前，秋葉原でテレビ，冷蔵庫，洗濯機，変圧器を買い，持ち帰ったが，1 年ほど経ってから，電圧が不安定なため，変圧器が壊れた。

日本からの仕送り金は足利銀行から咸興の銀行に届く[7)]。通知が来ると，通行証をすぐにもらえる。咸興まで列車で取りに行く。パックントン（外貨交換券）で受取る。列車内では，スリに盗まれないように細心の注意を払う。

市内はオンボロバスが走る。国産車のほか，チェコ製，ソ連製など大小いろいろなバスがある。たえず修理し，ようやく動いている状態だった。いつも超満員で，なかなか乗れない。高校には，バスに乗るよりは歩いたり（40–50 分），トラックに飛び乗って通うことが多かった。時刻表はない。最終運行時刻もまちまちで，夜 7 時だったり 10 時だったりする。運転手の自己都合や気分で変わる。市内にターミナルと事務所がある。

75 年ごろ日本のマイクロバスが 4–6 台，金日成の贈り物として届き，走り始めた。しかし右ハンドルのため，右側走行の北朝鮮では停留所で反転しなければならなかった。1 年ほどしたらガタガタになった。

道路工事は都市経営事業所が行う。日本製のローラーが 2 台あった。

平壌に妻の叔母が住んでおり，叔母の住所を借りて日本から現金書留で円貨を送ってもらうこともある。その場合は平壌の中央郵便局に取りに行く。郵便

7） 足利銀行は 1980 年代から 90 年代にかけて，北朝鮮の銀行とコルレス契約を結ぶ数少ない日本の銀行のひとつであった。同銀行は，核開発疑惑が深まるとともに，日本から北朝鮮への重要な資金流出ルートを形成しているとして国内外で問題視された。

局で現金を受取れるのは平壌の帰国者だけに認められた特権だった。

伝染病はとくに目立ったものはなかった。麻疹の予防注射が行われた。衛生管理が不十分なため大腸炎が多かった。これに罹って死ぬほど苦しんだことがある。薬はあったが，質が悪かった。

両江道人民病院に幹部用の科があり，ソ連製のペニシリンなど，良い薬はそこで使われる。一般住民がそうした薬を使うには賄賂を払わねばならない。

従来，産婆がいたが，禁止された。病院の産婦人科が産院に変わった。市や洞の病院の産科医を一か所に集めた。5 階建ての建物の半分が産院（他の半分は企業）で，妻は 6 人部屋に入院して出産した。特段，問題はなかった。

次男がときどき病気になり，入院した。大腸炎と肺炎の合併症で生命にかかわることがあった。担当医は，良い生活をしていた日本からあえて帰国して来た私に同情して，一般には手に入らない高級なソ連製かブルガリア製のアンプルを注射してくれた。

輸血をするとビールス性肝炎になることがあり，病気の子どもに輸血させない親もいた。病院には，住民が献血した輸血用の血液がある。そのほか，血漿があるが，普通は使ってもらえない。次男には，あとでお礼をするからと院長に頼んで，使ってもらった。担当医は，親戚が両江道人民病院の副院長だったので力があり，良い薬を処方してくれた。

平均寿命は 60 歳未満だったと思う。40 歳すぎると爺さん，婆さんに見える。方言で，アバイ，アマイという（標準語のハラボジ，ハルモニ）。

公開処刑が行われ，住民は人民班を通じて見に行くように指示される。行かないと同情していると思われる。私は見たくなかったので，職場に出るようにした。

国が収買事業で，犬皮，豚皮の供出を求めたが，住民はなかなか応じなかった[8)]。当局はやむなく，応じた者には代償として，洋服の生地や革靴を与えた。高校生のとき，ノルマとしてウサギの皮を持って行ったことがある。国が外貨

8） 収買は，日本統治下，戦時期に実施された供出に相当する。北朝鮮では日本の敗戦直後から，収買と称して様々な有用物資を住民に提供させることが行われていた。

稼ぎのために，ドル換算で国民一人当り，獣皮何枚，ワラビやゼンマイ何キロ，くず鉄や銅何キロというように割当てた。私は面倒なので闇で買った。人民班や工場からノルマが下りてきたが，金だけ払ったり，何かモノを持って行って，収買係に証明印だけ押してもらった（収買事業は80年代になってやかましく言われるようになったが，工場が動かなくなり，それどころではなくなった）。

ソ連への出稼ぎは人気があり，希望者が多かった。3年任期だった。賃金でいろいろな品を買い，持ち帰る。

70年代はそれなりに経済が回っていた。質は悪いが，品物は何とか手に入った。

3. 工場

〈恵山総合機械工場〉

恵山総合機械工場には，自ら希望して移った（市の労働課に申し出た）。金日成の教えを真に受け，事務所より労働の厳しい工場で働くことを選んだ。

1981年に結婚するまで，工場の寮に住んだ。親しい帰国者の知り合いがおり，寮に入れるようにしてもらった。重労働者のため，食糧は1日800グラム配給され，食べていくことができた。

工場には中央から生産ノルマが下りてくる。

両江道とくに恵山近辺で必要とする様々な機械（農機具，ベルトコンベアー，クラッシャー，砂金用大型選鉱機など）を製造する。鉄板等，原材料は中央を通じて各地の工場（清津や降仙の製鉄所など）から供給された。

工場労働者は合わせて300人ほどで，3班に分かれて仕事を行う。ひとつの班は，「軍事動員部」の武器作業場で撃鉄や薬莢を製造する。武器作業場は工場の離れにあり，労農赤衛隊が武器をもって監視している。そこには工場の幹部も入れない。

仕事は製缶工で，各人あるいは3–4人1組のノルマがあり，きつい。

勤務は週6日，火曜日が休日。朝8時ごろ出勤，朝会（ミーティング）のあと9時ごろから日暮れ（夏は7時ごろ）まで現場で働く。昼，持参した弁当を食べる。金日成が両江道に現地指導に来たときは1日18時間労働をした。

旋盤は国産が多い。ソ連製のものをモデルにし，熙川（慈江道），亀城（平安北道）の工場で作られた。戦前のもの［日本製］が 1 台あった。電動機もソ連製をモデルにした国産品だった。

機械は壊れやすく，そのつど自分たちで修理をする。機械が動かない間，鉄板の裁断などの作業を人力でしなければならないので生産に時間がかかる。

80 年代には停電が増える。80 年代後半には，材料が来ないので仕事がなくなり，タバコを吸うだけになる。

〈他工場〉

兄が働く製紙工場では毎日 60 トン，トラック 10–12 台分もの石炭を使い，クラフト紙などの紙を製造していた。労働者は全部で数千人，ボイラーが 4 基あり，通常 3 基が稼動し，1 基は休ませる。山で伐った材料木を貨車で工場まで運ぶ（鉄道の引込線が工場まで伸びている）。80 年代になると入荷する石炭が不足し，稼動するボイラー数が減った。

兄は重労働のボイラー工だったので，月に一度，食用油 1 リットル，肉 1 キロが配給された。

製紙工場の隣に紡織工場がある。機械はたぶんソ連製で，部品が壊れても国産品で代替できず，別途，取り寄せるまで機械が動かないことがあると聞いた。シャツなど一般衣服のほか，軍事用の作業場ではシートや軍服を製造していた。労働者は数千人，恵山では製紙工場と並ぶ大規模工場で労農赤衛隊が正門で警備している。

素材は麻と綿だった。近くの農場で麻を栽培し，そこに加工工場があった。そこから麻を調達する。綿は西部の産地から送られてきたと思う（平安南道に行ったときに刈り入れ前の棉畑を見たことがある）。

80 年代半ばごろ，東ドイツの技術者が来て，紡織工場の設備を切り替え，ボニロン（原料はおそらく，ソ連を経由してどこかから輸入した）というトリコットのような肌触りがよく暖かい繊維製品を作り始めたが，長続きしなかった。技術者は 1 年ぐらいいて，その後いなくなった。

チェコスロバキアの技術者が来てホップの選別工場を造った。恵山には全国的にも知られる良質のホップを生産する農場があった。しかしのちにその生産量が落ち，質も低下し，選別機がホップをはじいてしまうようになった。大きな工場だったが何年間も続かなかった。

帰国者の叔父の朝鮮総聯幹部が設備一式を持って来てビール製造工場を造り，甥がその支配人になった。話を聞いた平壌の竜城ビール工場の関係者が，外貨稼ぎをするもくろみで，「設備を譲ってくれ，東洋一のビール工場を造るから」と言いに来た。叔父は怒って，それなら甥を平壌のビール工場の支配人にしてくれるかと言ったが，平壌の工場支配人は党中央が決めるぐらいの高位職なので，結局，設備を譲ることはなかった。工場は稼動したが，設備が日本製だったため，瓶に栓がうまく嵌らないといったトラブルが生じた。

960 という番号がついた工場がある。通常，番号がつく工場は軍事工場であるが，960 工場は平壌の中央幹部向けの食料品，日用品（酒や毛皮帽など）を造る。賄賂を入れれば（朝鮮語でサバサバと言う），横流ししてもらえる[9)]。

恵山には軍事工場はないが，どの工場にも武器作業場がある。

製麺・酒造工場は，製造技術にくわしい中国朝鮮族の者が始めた。彼はスカウトされて 960 工場に移った。90 年代半ばには，技術を覚えた女性従業員が中心となって酒造りを継続した。

4. 協同農場

市の周辺には，里（村）単位に協同農場がある。ひとつの協同農場は 4–5 つの作業班に分れ，班はさらに 4–5 組に分かれる。ひと組はおよそ 10 世帯から成る。栽培するのは主としてトウモロコシ，他に大豆，大麦，ジャガイモなどで，米作田は少ない。山を切り開いて作った農場もある。そこでは初めに大豆を植え，土を肥やす。その後，トウモロコシなどを栽培する。

トラクターはソ連式の大型のもので，ディーゼルエンジンで動く（燃料は軽

9） サバサバという言葉は韓国でも使われる。起源は不明だが，日本語かもしれない（高級魚だった鯖に由来するという説がある）。

油)。両江道は山がちで斜面が多いのでトラクターはあまり使えず，牛のほうが重要である。牛の管理は徹底していた。春の牛耕前には，蒸かした大豆を他の餌と混ぜて食べさせ，栄養をつける。

春，工場から恵山市の隣，普天郡の協同農場に支援に行ったことがある（農村動員)。ジャガイモを植える手伝いをした。農場に泊まり込む。そこは辺鄙な地域なので，それまで支援者が来たことはなかった。農場が広く，人手が足らないので，収穫したジャガイモを運べず，腐らせていた。

一時期，金日成の指示で山に段々畑が造られた。ポンプで水を一番上まで揚げ，上から水を流し，米作りをしたが，収穫はゼロだった。

中学生（高等中学生）のとき，黄海南道康翎（カンリョン）郡に 2 か月間，農村動員に行った。そこではトラクターが多かった。トラクターが入れない狭い畑では牛犂きをする。農村動員は，人数次第で 10 日で終わることもあれば 1 か月続くこともある。

農村の家屋は木造平屋で，ブロック造りの街の家屋よりは広い。壁やオンドルは赤土で造る。家屋は畑の近くにある。組ごとに家屋群が点在する。

農村には戦前からの良い家具（お祖母さんの嫁入り道具など）をもつ家もある。そのような家は街ではみられない。

普天郡の農場員は，味噌や衣類など，配給がある日には，何時間もかけて牛車で街まで出かけ，いくつかの世帯分まとめて配給品を持って帰る。恵山市内に比べ，農村の生活は一層ひどく，見ていられないぐらいだった。住民は継ぎ接ぎだらけの衣服を着ている。両江道でも田舎に行くと紙は非常に貴重で，排便後，木の棒や葉で尻を拭く。

秋にジャガイモやトウモロコシが出来ると軍がトラックで農場にやって来て，取り分を持って行く。市や郡の糧政事業所からもトラックが来て，事務所の倉庫や穀作地帯の他道に運んで行く（両江道には，他道に供給したジャガイモと交換に，ジャガイモ 5 キロにたいし雑穀 1 キロの割合で雑穀が供給される)。ジャガイモは嵩張り糧政事業所の倉庫に入りきらない。その分は直接食糧配給所に運ぶ。

米作地帯の農場には精米所があり，自分たちが食べる分はそこで精米する。軍は籾のまま持って行く。

三水郡，甲山郡は昔から島送りの地で，農場で働く住人の 70% は追放されて来た者といわれた。両江道の言葉でなく，「内陸」（平壌）の言葉を喋る。ある秋，どちらかの郡に農村動員で行ったとき，一人の年配の農場員がボロボロの衣服を着，チリ紙もないので，手で洟水を拭いていた。彼は以前，平壌にいた党幹部で，まさかと思ったが，家に行くとネクタイを締めた平壌時代の正装姿の写真があった。高級幹部は別だろうが，普通は一生，平壌に戻れない。そのような追放者の子弟の大半は，中学までの義務教育しか受けられない。

農村では各家庭に必ずアヘンがある。薬がないので，風邪を引いても，大腸炎になっても，とにかく体調が悪いときはアヘン（ケシから出るヤニ状のもの—朝鮮語で「チン」）を使う。チンを匙に載せて火であぶり，水に溶かして飲む。自分の畑でケシを栽培する。

普天郡では，金正日の指示で，外国にアヘンを売るためにケシを栽培したことがある。農場員にノルマを課し，芽の出た大麦を掘り起こし，ケシを植えさせた。1 年間やったが，国際的に問題となり，以後取りやめになった。農場員は労働報酬として食糧の代わりにアヘンを受取る羽目になり，自分たちがアヘン中毒になった。

農場員の子どもは，都市に出て労働者になることはできない。農場から脱するにはまず軍隊に行き，除隊するときに上の者にアピールして都市に移住する。頭が良く，親が農場幹部なら，農業大学に進学し，帰って来て農場幹部になったり，道の農業経営委員会に就職することができる。

小・中学校は里ごと，あるいは里と里の間に 1 校あり，子どもは歩いて通う。また各郡に農業高校がある。生徒は寄宿舎に住む。

都市から農村に嫁に行く女性は滅多にいない。そのような中，ある女性が支援のために行った農村で若者に一目ぼれして結婚した。政府はそれをカンパニアとして大々的に取り上げ，女性の農村「進出」を推進しようとしたが，恵山周辺で同調者がいたかどうかは知らない。両江道の貧しい農村に多数の都市民

女性が進出することは考えられない。

5. 「苦難の行軍」・飢餓――80 年代後半から 90 年代

1989 年，世界青年学生祭典が平壌で開かれてから，経済状況が悪化した。費用を全額開催国が負担することになっていたため，他の社会主義国は開催を断ったが，金正日が引受けた。

80 年代から運び屋が出現し，恵山で採れる銅や貴金属を中国に運んで売り，その金で品物を買い，ヤミで売るようになった。80 年代後半には，彼らは胴元になり，他人を使って銅の収集，密輸をやらせる。90 年代には中国から食料を運んで来る。本来は禁止だが，保衛部［警察］は見て見ぬふりをする。

1987 年に全国的な水害が起き，国連が食糧，薬の援助をしたが，ヤミ市に流れた。日本からの援助米も同様で，被災者がヤミ市で買った。

80 年代半ばから，人民班や職場の作業班で肥料用人糞集めのノルマが出る。昼間，人糞がたくさん溜まっていそうな共同トイレに目星をつけ，夜になって集めに行くが，しばしば他の連中と奪い合いになる。人糞 1 キロは，動物の糞と土を混ぜた糞土 40 キロと同等に評価されるので，糞土なら何トンも集めなければならないところ，人糞なら数十キロで済む。それで，皆が人糞を狙う。集めた人糞は，農場から牛車で取りに来る。

恵山では 80 年代後半から給料が出ず，配給も途絶えるようになる。15 日に 1 回の配給が 10 日に 1 回になった。1992 年には配給が全くなくなった。私は，勤務先の水道・暖房事業所から，貯まった配給票の分だけ食糧（白米 200 キロ）をもらった。食糧は，幹部用か非常用か分からないが，糧政事業所の倉庫にあった。水道・暖房事業所が両江道トップの党責任秘書と交渉し，食糧がなければ飲料水の供給が出来ないと言って，作業班各員に食糧を提供させた。

1994–95 年ごろ，餓死が内陸地域から始まった。恵山は中国と密貿易ができたので何とか食べられた。

両江道は中国の長白県との交易権を認められ，工場の支配人が労働者から金を集めて木材を仕入れ，これを中国に売った。その金でニワトリなど動物のエ

サを買い，食料にした。

私ははじめに恵山のアパート［の居住権］，その後は持っていた冷蔵庫などを売り払って食いつないだ。妻は薬のヤミ商売をした。

内陸民が食料を求めて，恵山などの国境地帯に流れて来た。山菜を採りながら歩いて山を越えて来たり，列車でも来ただろう。流浪民が家に来て食料を乞い求めた。初めは泊めたり，食料をやったりしたがキリがない。そのうちに同情心がうすれ，追い返すようになった。流浪民は駅や市内のあちこちで野宿する。鴨緑江を越えようとして流された流浪民も多い。

工場周辺にも死体が多数ころがっていた。当初は人民委員会が死体を処理した。そのうち死体があまりに多くなったために，処理を工場に命じた。棺桶に入れて山に埋めたが，次第に棺桶の板の調達が困難になった（工場労働者が金を出してヤミで入手しなければならない）。やむなく，夜，抱えて鴨緑江まで運び，捨てるケースが続出した。恵山での餓死のピークは 1996–97 年だった。大半は流浪民で，恵山の住民の餓死はあまりなかった。

コレラやインフルエンザ（朝鮮語でパラカムギ―「パラチフスの風邪」と呼んでいた）が流行り，多くの人が死んだ。病院に薬がなくなり，病気をしても入院する意味がなくなった。自分で中国からリンゲルを何十本も手に入れ，持っていかなければならない。

農村住民も相当数，餓死したと思う。農場で分配されるはずの食糧がなくなる。種すらない（穀物の種は本来，中央から供給されるものだが，途絶える）。街ではヤミ市で食糧が手に入るが，農村ではそれもできない。

金正日に忠誠を誓った人々が餓死し，うまく立ち回った人が生き残ったと思う。商売で金を儲け，何とか食いつなぐ。知恵を働かせる。たとえば，薪がなければ，電気炊飯器を使う。周囲には風力発電機を持つ者もいた。

6.　その他

恵山の近くの山麓には軍の飛行場がある。金日成が別荘に来るときに使う。

市内には学校は数多くあり，街の子どもは余程のことがないかぎり，高校ま

で行く。

大学は，農林大学，医学大学，教員大学がある。農林大学は裏山に試験林をもっている。帰国当初は鬱蒼としていたが，薪用に伐採したので 80 年代半ばになると禿山になり，愛国烈士墓の周囲だけ木が残った。恵山周辺の郡でも同様に伐採が進み，90 年代には完全に禿山になった。山林保護員がいるが，家族や知合いには伐採の許可を出す（正当な間伐材として木の幹に許可の印を付ける）。伐採したあと，根を掘って，それも薪にする。根を持ち去るのは違法にならない。90 年代には根すらなくなる。

郡の協同農場員がかなり高い山の方まで行って木を伐る。伐採した木は街の住民に売って現金化する。それでも薪が不足し，薪の価格が上がった。トウモロコシの飯より薪のほうが高価になる。

恵山の工場，家庭では咸鏡南道コチャン産の無煙炭（1 グラム当たり 1,800–2,000 カロリー）を使っていた。恵山にあったのは有煙炭鉱で，産炭はコチャンの無煙炭よりカロリーが低く，火力が弱かった。炭脈が鴨緑江の地下に食い込んでおり，掘り進めると危険なので廃坑にした。70 年代後半からコチャン産の入荷が減ると，採炭を復活させたが，市内の需要を満たすほどではなかった。

鉄道は，幹線は電気機関車だが，恵山から近郊の支線は蒸気機関車である。70 年代は咸興まで 12 時間，平壌まで 22 時間（急行）で，平壌からは朝，到着，平壌行きは夜 9 時か 10 時に出る。80 年代には恵山―満浦間の内陸線が開通する。80 年代後半からは停電のため遅れがひどく，咸興まで 1 週間から 10 日もかかるようになる。超満員で乗客は列車に鈴なり状態となり，蓋にも乗る。盗まれないように荷物をかかえ，立ったまま何日もすごすこともある。乾燥トウモロコシ粉（「ポンポンイ」―圧力をかけてポップコーンのようにしたもの）を持参し，水で戻して車内で食べる。

義兄（妻の長兄）が金策工業大学冶金学科を卒業し，慈江道の総合機械工場技師長をやっていたので，何回か遊びに行った。工場は満浦市から汽車で 1 時間余の城干郡中城干にある。3 つの分工場があり，数万人が働く。本来，番号のついた軍事工場だが，表向きは一般名で呼ばれた。軍事工場であることは誰で

も知っている。長兄の家は工場の敷地内にある。1 日何交替か分からないが，交替のときは蟻のようにうじゃうじゃと労働者が出入りする。

1980 年代，金正日が中城干に 8 号工場という特殊鋼製造工場の建設を企てた。義兄はその支配人に指名され，日本に行き，東海商事を通じて製鋼設備を買った[10)]。工場は，労働者数 3–5 千人にすぎなかったが，特級工場であった。しかし総合機械工場（1 級工場）では，長兄がいなくなると困るので，結局，義兄は異動しなかった。その代わりに長兄は労働英雄になり，待遇が上がった[11)]。

慈江道の工場はすべて軍事工場で，山中にある[12)]。熔鉱炉や武器製造の重要作業場は地下に造られている。

80 年代は総聯の祖国訪問団が帰国者に多くのモノやカネを持って来た。それが賄賂や取引などで回り回って，北朝鮮全体が潤った。多くの住民がパックントン（外貨交換券）を使う。地方の住民も平壌の外貨商店に行って，日本製の生地などをまとめて安く買ったりした。合弁会社もいろいろできた。在日朝鮮人が設備，資材をすべて日本から持って来る。北朝鮮側は土地と建物を提供する。

70 年代から恵山の便宜協同で帰国者の女性が美容師をしていた。彼女の姉が日本から訪問団で恵山に来て，妹に中古パーマ器 4 台を贈った。おそらく姉が市と話し合い，便宜協同に共同浴場と理容・美容室を備える施設を造り，妹がその支配人になった。しかしそのうちに石炭が不足し，停電でパーマ器も使えなくなり，90 年代には営業できなくなった。

市の党委員会から工場に党員数のノルマ（朝鮮語でポントゥ「封筒」）が下りて来て，工場の党秘書が適任者を選ぶ。党員が多いと工場の格が上がるので，工場では党員を増やすように努力する。私が労働党員になれたのは，仕事を頑張ったことと母の援助があったからで，機械工場の党秘書に「挨拶代わり」の

10） 東海商事は朝鮮総聯系の商社で，1961 年に設立された。日朝貿易専門の商社として日本から北朝鮮への軍需物資の輸出に大きな役割を果したが，1999 年に破綻した（木村・安部 2008：81, 155–56）。

11） この工場について，高青松は同一内容の証言をしている（高　2001：55）。

12） 高によれば，北朝鮮最大の兵器工場は慈江道江界の 26 号工場で，そこではミサイルや生物・化学兵器を生産していた（高 2001：33, 46）。

品を贈った。品は，母が送ってくれた日本製のナイロン防寒着で，当時北朝鮮で人気があった（外貨商店でも売っていた）。党員になっても帰国者は監視対象である。

帰国者は各都市に配置されるが，平壌に住めるのは総聯幹部の息子など特別な者に限られる。軍事機密上の理由で，開城，慈江道ほかいくつかの地域には帰国者が配置されない。希望すれば農場にも配置されるが，機械作業班など農作業以外の仕事をする。

帰国者も兵役に就くが，私は眼が弱いため，免除された。1974 年ごろ，帰国者を集めた特殊部隊（「帰国者部隊」）ができた。日本で空手をやっていた先輩が入隊したが，怪我をして除隊した。この部隊はおそらくその後，なくなったと思う。

妻の親戚が恵山市水道・暖房事業所の支配人だったので，92 年にそこに移った。鴨緑江から水を汲み上げ，消毒して，供給する。大雨に備えて中国側の鴨緑江湾曲部に石を敷いて洪水を防ぐ仕事をした。そのころには住居の居住権がヤミ売買されるようになり，恵山の隣駅，渭淵（ウィヨン）の妻の実家近くに住居を買った。現金で 2 万 2 千ウォン払う。役所に届けることはなく，たんに相手との約束で権利を得る。

金日成がモビロンで全国の高校・大学生用に制服を作れと命令し，全員に配ったが，その後，モビロンの話は聞かない[13)]。

順川のビナロン工場は，建設されたが稼動しなかった[14)]。

7. 若干の考察――むすびに代えて

以上，経済生活を中心に石川氏の証言を整理した。どの証言もそうであるよ

13） モビロンはポリ塩化ビニール繊維である。北朝鮮では 1980 年代に金日成が，綿の代用品として工業化をすすめた（木村・安部　2008：191–92）。

14） 金正日が力を入れ，1983 年に着工，1989 年にビナロン年産 5 万トンの第 1 期工事を完了した（イ・サンジク他　1993：131）。しかし技術的問題のために操業できず，日本の技術者の協力と日本製の中古設備により 1998 年に稼動させた（木村・安部 2008：187）。

うに，それは主観と客観の入り混じったものである。この場合は，在日，帰国，脱北，再び日本という個人史から，北朝鮮での生活にたいする否定的見方が色濃い。これは一種のバイアスといえるかも知れない。他方，日本に戻った後に知った事柄が回顧に反映されている個所もあるだろう。しかし証言の大部分は氏が直接体験した事実にもとづく。氏は確かな記憶力と高い知力により，多くの質問に明晰に答えた。そこには新奇な内容，学術的に意義深い内容も少なくなかった。

まとめとして，若干の考察結果を記す。

① 石川氏の体験は全体的に，北朝鮮経済をめぐる従来の脱北者証言や研究者の観察と一致する。すなわち，70 年代の相対的安定，80 年代中盤からの困難増大，90 年代の事実上の崩壊である。

② 70 年代，北朝鮮の経済システムは一応機能していたが，成果は乏しかった。生活物資の不足，民生技術の遅れが顕著で，一般住民は貧しい生活を送っていた。とくに農村の貧困は深刻であった。都市と農村の格差は低開発国の特徴で，この点，北朝鮮も例外ではない。

③ 北朝鮮経済は中央集権的計画経済であったという見解は正しくない。国家が体系的な経済計画を立てそれを実行に移したことがないからである（木村 1999：153）。そこにあったのは，恣意的な生産ノルマ下命・基礎物資の配分指示にすぎない。石川氏の証言もこのことを示唆する。筆者はこれを無計画命令経済と呼んだ（木村 1999：159）。現在もこの見方は妥当と考えるが，これで北朝鮮経済の特質をすべて表現できるかと問われれば，もちろんそうではない。70 年代の北朝鮮経済で資源配分を決定したメカニズムは何か。市場は抑圧され，公にはほとんど認められていなかった。しかしヤミ市場は相当の規模で存在した。同時にそれと同等あるいはそれ以上に，コネが重要だった。とくに血縁関係による人脈が物資の調達を大きく左右した。これは他の社会主義国にはみられない北朝鮮独特の特徴かもしれない。こうした点をさらに精査し，いかに理論化するかは依然，重要な研究課題である。

④ しばしば，金日成の時代は良かったが，金正日が実権を握り，恣意的な政策

を行うようになってから経済状況が悪化したといわれる。石川氏も，1989年の世界青年学生祭典の開催が経済に大きな打撃を与えたと述べた。しかしじつはこの背景には，国際環境の大きな変化があった。それはソ連の経済困難と国家崩壊である。ソ連ではゴルバチョフがペレストロイカを推進する過程で，対北朝鮮貿易をバーターから外貨決済に切り替えた。その結果，北朝鮮はソ連から原油や設備・資材を従来のように入手することができなくなった。こうした事実は一般の脱北者の目には映らない。

⑤ 90年代の飢餓の規模と要因の究明は，脱北者証言のみではむずかしい。石川証言では内陸民の餓死が多かったという興味深い事実が示された[15)]。他の面からみると，恵山は中朝国境に位置するという特別に有利な条件下にあったために，市民の間に餓死が広がらなかったといえるだろう。しかし内陸民がどれだけ餓死したのかを数量的に把握するには，全国的な統計を含む体系的な資料調査が必要である。くわえて重要な事実は，この時期に核ミサイル開発が急速に進められたことである。そのために大量の資源が投入された。それがどのていど飢餓の要因となったのか。これを知る手がかりは，脱北者証言には多くない。

参考文献

朝日新聞アエラ編集部編（1995）『北朝鮮・亡命者五十人の証言』朝日新聞社
イ・サンジク，チェ・シルリム，イ・ソッキ（1996）『北韓の産業　鉱工業部門企業便覧』産業研究院，ソウル（韓国語）
伊藤亜人（2017）『北朝鮮人民の生活　脱北者の手記から読み解く実相』弘文堂
木村光彦（1999）『北朝鮮の経済　起源・形成・崩壊』創文社
木村光彦・安部桂司（2003）『北朝鮮の軍事工業化　帝国の戦争から金日成の戦争へ』知泉書館
―・―（2008）『戦後日朝関係の研究　対日工作と物資調達』知泉書館
斉藤博子（2010）『北朝鮮に嫁いで四十年　ある脱北日本人妻の手記』草思社
高青松（中根悠訳）（2001）『金正日の秘密兵器工場』ビジネス社
李英和（2000）「北朝鮮の食糧危機と難民発生に関する調査報告」上，下『経済論集』関西大学，第49巻第4号，第50巻第1号

15）　中国で脱北者による聞き取り調査を行なった李（2000）によれば，大量餓死が最初に発生したのは両江道の山間部であったという。